

# Marine Turtler マリンタートラー

特定非営利活動法人日本ウミガメ協議会機関誌

第35号





### 表紙の絵

## 井上 直美

今号の表紙絵は事務局の井上が描きました。夏といえばフェス!?とのことでウミガメフェスのイラストです。「普段、事務局で内勤ばかりの私ですが、ストラニディング（死亡漂着）調査に同行したことがあります。かつては産卵がみられた大阪の泉南地域の浜で、ひっそりと亡くなっていた大きなオスのアカウミガメ。彼の長い長い旅路に思いを馳せました。最後に辿り着いたこの浜が、彼の生まれ故郷の浜だったらいいのにな。」



## 表紙の絵を募集しています！

皆様から表紙の絵を大募集しています!! 可愛いイラスト、リアルなウミガメ、ウミガメをモチーフにしたデザイン等々、ウミガメに関するものでしたらどんなものでも構いません。ウミガメを見る機会のある方や、日頃から深くウミガメに関わりのある方はぜひ一度ご応募ください。皆様からの素敵なお絵をお待ちしています。

- ・サイズ B5
- ・色 カラー
- ・期限 メ切はありませんが、次号の掲載をご希望の方はお早めにお願いします
- ・応募方法 大阪事務局に郵送又はメールでお送り下さい
- ・送付先 〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302  
日本ウミガメ協議会 マリンタートラー編集部  
メール [info@umigame.org](mailto:info@umigame.org)  
(件名に「マリンタートラー表紙絵」と明記の上お送り下さい)

## Marine Turtler とは？

会報の名称マリン・タートラー(Marine Turtler)は、英和辞書には載っていません。つまり、教育的にはあまり相応しい英語とは言えません。ただし、米国ではウミガメ関係者をこう呼ぶことがあります。ウミガメを守りたい人や、ウミガメを研究したい人、立場上仕事でウミガメに関わるようになった人、ウミガメが好きな人など、ウミガメに関わる全ての人を、我々はマリン・タートラーと呼ぶことを提唱したいと思います。

# CONTENTS

水族館とウミガメ8	マリンワールド海の中道でのウミガメ類の調査・研究 活動報告（宮地勝美）	2
各地のマリンタートラー紹介	あかばね塾うらしま隊（渡邊幸久）	4
もしもし亀屋さん♪亀屋さんよー♪	宮崎を訪れて（若月元樹）	6
各地からの報告	あたまを2つ持つウミガメ（北山知代） 室戸での標識放流 5000 頭突破！（空田知久） 第34回日本ウミガメ会議名古屋港大会のご案内 (松宮賢佑) 痕跡調査のお話（中西悠）	8 10 12 13
実習報告	インターン実習を終えて（奥田希心）	16

## マリンワールド海の中道でのウミガメ類の調査・研究活動報告

マリンワールド海の中道 展示部魚類課 宮地 勝美

マリンワールド海の中道では、1989 年の開館から継続して、北部九州域でのウミガメ類の調査・研究活動をしています。今回はこれまで当館で行ってきた上陸産卵調査と漂着調査を紹介します。



マリンワールド海の中道正面

上陸産卵調査は毎年 7 月から 9 月末までの期間、過去にアカウミガメの産卵事例があった砂浜を定期的に歩き、行っています。上陸産卵が確認されれば卵の移植はせず、自然の状態を見守る形で、地域の方々と観察会や孵化後の調査も行ってきました。しかし日本海側という事もあり産卵は稀なことで、当館の調査地ではここ 10 年以上確認されていません。

漂着調査は通年実施していて、当館での発見だけではなく漁師や一般の方からの情報提供にも対応し、種類、大きさ、状態などを記録しています。福岡県のみの事例では、1989 年から 2022 年まで死亡漂着 97 個体、混獲・救護 86 個体、合計 183 件ありました。北部九州では冬期に低体温で衰弱した状態で漂着する場合もありますが、生存しているものは救護して記録しています。これまで確認されたウミガメは 5 種類で、内訳は表1のとおりです。ヒメウミガメは稀で、死亡漂着の情報が寄せられたのみで私個人は見た経験がありません。

種類	死亡漂着	混獲・救護	合計
アカウミガメ	50	24	74
アオウミガメ	35	37	72
タイマイ	3	24	27
オサガメ	8	1	9
ヒメウミガメ	1	0	1
合計	97	86	183

表1 福岡県におけるウミガメ漂着調査（1989 年～ 2022 年）

種類によって甲長の大きさに傾向が見られ、アカウミガメは甲長 10cm 未満のグループと甲長 60cm 以上のグループに分かれています。アオウミガメは甲長 10cm から甲長 97cm までのいろいろな大きさが見られ、タイマイは甲長 20cm から 45cm、オサガメは甲長 120cm から 150cm の大きさでした。表1よりアカウミガメやオサガメは死亡漂着が多く、アオウミガメとタイマイは生きた状態での混獲・救護個体が多いことが解ります。これは冬期の低水温により、アオウミガメやタイマイが活動中に漂着することが多いためと推測されます。

実際、海水温度が低くなる 11 月から 2 月の時期、低体温で衰弱したウミガメが当館へ持ち込まれます。外傷等でも持ち込まれることがあり、その都度処置を施しています。しかし回復に導けることなく、残念な結果になることも多々あり、その時はとても無力を痛感します。体力の回復や外傷の治癒が確認されれば、標識を装着させて、その年の夏に海へ放流しています。

「ウミガメ」という名は周知されていますが、その生態はまだ解らない事ばかりです。このような調査を積み重ねていくことが、とても重要かつ大切なことであると考えます。そのほとんどが一般の方々からの情報提供と協力にあります。最後に、この場を借りて情報を提供いただいた方々に感謝と御礼を申し上げます。



元気に回復し海に帰るアオウミガメ

### あかばね塾うらしま隊(渥美半島田原市)

渡邊 幸久

「あかばね塾」は、当時の赤羽根町が政府の「ふるさと創生事業」（1988～1989）のもと交付された1億円を基金にして、その利息の一部を資金に 1991 年に立ち上げたまちづくり団体です。その活動の中で 1992 年に浜松市のサンクチュアリジャパン馬塚丈司氏を招き、ウミガメの講演の中で保護、調査方法を伝授頂き、活動を始めたのが「あかばね塾うらしま隊」です。発足当初は、サンクチュアリジャパンの活動を踏襲し、産卵巣の移植、子亀の放流会を盛んに行っていましたが、現在は移植は最小限に留めて自然孵化に努め、上陸・産卵調査、孵化調査、海岸清掃による産卵環境の整備に活動の重きを置いています。

2010 年には、第21回日本ウミガメ会議を田原市で開催しました。デビット オーエン博士をお招きし、「ウミガメの産卵と生態学」と題した基調講演の中で、気候変動がウミガメの性比に及ぼす影響を訴えかけたことが記憶に残ります。博士の危惧は10年以上たった今、更に増幅して私達の眼の前に立ちはだかっています。渥美半島表浜の産卵現場では、数年前から無精卵が疑われる産卵巣（好条件の産卵場所で、すべての卵が未発達）が散見されるようになりました。気候変動による気温上昇により雌化が進み、日本近海の個体群の性比バランスが崩れてしまっているのではないか…という危惧を、ひとつひとつ検証していくことが求められていると考えます。産卵現場として、各研究者の研究テーマの中で取り上げられている砂中温度の計測に、全面的に協力していきたいと考えています。



2020 孵化調査（観察会）全卵未発達



ウミガメ協議会による砂中温度の計測に協力

この30年間のウミガメの産卵地を守る活動の中で、砂浜の減少も大きな危機としてのしかかって来ています。砂浜が無くなれば、即ちウミガメの産卵場所の喪失に繋がります。実際、私達の調査地のうち旧田原町東部の久美原、浜田地区の約2kmと赤羽根港西側の旧赤羽根町若見、越戸地区、旧渥美町の川尻～和地地区の約5kmは近年砂が剥ぎ取られ、回復することなくウミガメの上陸・産卵が不可能な状態が続いています。表浜は天竜川の土砂の流出によって形成されている浜で、上流の佐久間ダムにより土砂の流下が堰き止められている現状では、劇的な改善は望みようがありません。現場にある砂を離岸堤や防潮堤、堆砂垣で他所に砂が行かないよう努力を試みるのですが、人工物では効果は限定的です。構造物のあるところの浜では砂の減少のスピードを遅らせることができますが、その周辺で壊滅的に砂を失うことになります。前記の砂の無くなった海岸がそれに当たります。

我々より4年前に活動を開始した隣町の「アカウミガメを守る会」が 2018 年に活動を休止しました。調査員の高齢化が理由です。行きがかり上あかばね塾で調査を引き継いだ形になっていますが、毎日砂浜を踏破して調査する人員を割く余力もなく、地元民やサーファー、釣人、ビーチコーマーなどによる通報に頼らざるを得ない状況です。高齢化の波は決して他人事ではなく、当方も30年以上活動を継続してきましたが、30歳代で始めた活動も皆60歳代となり、今後いつまで活動を継続できるのか先行き不明です。

いくつも課題ばかりあげつらいましたが、いづれもそう簡単には解決できそうもありません。自分たちの動ける内は、アカウミガメが産卵できる良好な砂浜を守っていきたいと考えます。

かつてのように産卵時期になると毎週調査地内の何処かで産卵報告があり、その内いくつかは早朝までに産卵を終えられずに「未だ産卵中」というメールが飛び交う…、そんな風景が戻ってくることを願いながら、また新しい季節を迎、地道に活動を続けていく所存です。



漂着ゴミ調査「国際ビーチクリーン」 赤羽根海岸

## 宮崎を訪れて

むろと廃校水族館 若月 元樹

7月、九州に出張が入ったことをきっかけに、宮崎まで足を延ばしました。

宮崎といえば、全国でも有数のアカウミガメの産卵地。そして、亀屋の皆さんのが注目する「サンドパック」<sup>1</sup>と呼ばれる養浜が、国の直轄事業で大規模に実施されている場所でもあります。

宮崎野生動物研究会の理事長・岩本俊孝さんと事務局長・出口智久さんに砂浜をご案内頂きました。長く続く海岸の規模に圧倒されましたが、それでも砂浜がやせ続けているとのこと。砂が減少した原因として、突堤や港の建設による潮流や海底地形の変化、川の上流にダムが建設されたことにより、山からの砂の供給が絶たれていることなどが挙げられると教えていただきました。

「サンドパック」がむき出しになっている現場もご案内頂き、今後も大きく環境が変化していく中での養浜事業の難しさを見せて頂いた気がします。

夜には他のメンバーの皆さんと一緒にしました。様々な職種の方々の集まりであるのは各地のウミガメ組織と同様ではありますが、学究肌な人々が集っている印象を受けました。この点はウミガメやヒトにとって、どのように砂浜を維持させることがベストなのかを検証する上で有効かも知れないと思ったりしました。



海岸をご案内頂き説明して頂いた岩本理事長（手前）と出口事務局長（奥）

<sup>1</sup> 「サンドパック」とは、丈夫な繊維で出来た巨大な袋に砂を詰めた大型の土嚢のようなもの。それを汀線（海面と陸地との境界線）付近に設置することにより、砂が波により持ち出されにくくなり、砂丘が崖状に侵食する浜崖の後退を防止、または抑止する効果があるとされている。



砂の流失で急こう配になっている砂浜。奥では養浜作業の重機が動いている。



アカウミガメの産卵巣の目印と  
食害対策のネット

### あたまを2つ持つウミガメ

認定NPO法人エバーラスティング・ネイチャー 北山 知代

2022年夏、海洋センターのふか場で頭が二つで体が一つの双頭のアオウミガメが生まれました。当初は「すぐに死んでしまうかも」と危惧していましたが、驚くべきことに現在も元気にスクスク成長しています。とても珍しい例ですので、今回はこの双頭ガメについて寄稿したいと思います。



それぞれ違う方向へ泳ごうとする双子ちゃん

この双頭ガメ（ここからは双子ちゃんと呼びます）は、2022年の7月18日に小笠原海洋センターのふ化場で生まれました。この双子ちゃんの様な双頭であったり、单眼であったりなどの大きな奇形が認められる場合は発生中に亡くなってしまうことが多く、生まれてくることは非常に稀です。そのため、双子ちゃんを発見したスタッフは大変驚きました。「なんだ、この子は…!?!?（驚愕）」。

当初は、成長せずに死んでしまう可能性が高そうだと考え、他のカメたちとは違う室内の水槽でしばらく様子をみることにしました。しかし、嬉しいことにそれは杞憂だったようです。2023年6月現在のSCL（標準直甲長）は15.5cm、体重は715gと同時期に生まれてきた他のカメよりもやや成長が遅くはありますが、着実に育っています。そして今は屋外水槽で他の子たちと同じように生活しています。

気になるのが双子ちゃんの体の構造です。双子ちゃんはどうやら胴体と後肢を共有しており、上体の右前肢は右の子、左前肢は左の子がそれぞれ意志を持って動かしているようです。頸椎はそれぞれにあり、続く脊椎は共有している（レントゲン等の撮影ができないので、あくまでも肉眼観察によります）。各々に自意識があるため、エサを食べる時は右の子と左の子がそれぞれ違う方向のエサを追いかけ、引っ張り合いのような状況になります。引っ張り合いに負けた方はエサを上手くとることができず、一時お預けのような状態になりますが、相手が食べている隙にエサの方に泳いでいくなど、なんだかんだうまくやっているようです。ちなみに、呼吸はそれぞれが異なるタイミングで行います。観察すればするほど、双子ちゃんは自分たちのことを「それぞれ完全に別の個体だ」と認識しているように感じます。

内臓は一体どうなっているのでしょうか？頸椎がそれぞれにあることから、食道および気管は1頭ずつ個々にもつことが予想されます。また総排泄腔は一つなので、少なくとも大腸（の一部）は共有しているようです。その他の臓器に関しては正直全くわかりません。そのため、今後CTやレントゲンを撮影する機会を設けて明らかにしたいと考えています。続報がありましたらまたこの場で共有させていただきます。

双頭ガメを見たいという方はぜひ海洋センターにご来館ください。お待ちしています！



脱出して間もない頃



現在の姿

# 室戸での標識放流5000頭突破！

むろと廃校水族館 空田 知久

日本ウミガメ協議会では 2000 年頃から高知県室戸市でウミガメの調査研究を行っており、2003年より職員を常駐させ、2018年にはむろと廃校水族館を運営しウミガメの飼育管理を行っています。

なぜ室戸で調査を行っているのかというと、アカウミガメの上陸・産卵があるのに加え、太平洋に面した定置網漁が盛んに行われているために、ウミガメが誤って網にかかってしまう「混獲」が多いからです。そのため、普段上陸をしないオス個体や若いウミガメをたくさん調べることができます。混獲されたウミガメには、個体識別をするための金属製の標識タグ（インコネル）を左前肢と左後肢に装着してから放流しています。この度、室戸で標識タグを装着して放流したウミガメが 5000 頭を超みました。

室戸の定置網は大敷網と呼ばれます。垣網と呼ばれる網が陸側から沖側に向かって約 1 km のびており、運動場・昇り・箱網と呼ばれる魚の通り道となる網が長さ約 500 m 幅約 90 m、深度約 75 m に位置しています。ここにハンドウイルカやクジラ、リュウグウノツカイやジンベイザメなどの大きな生き物たちが入ることは、室戸では珍しくありません。このように定置網が大きく外洋に面しているため、黒潮の流れに沿って回遊しているウミガメが入りやすくなっています。

そして、何よりも調査に欠かせないのが漁師の方々の協力です。ウミガメが混獲されることについて、漁師さんからすると本来の漁獲対象種ではないため網を引くのが余計に重くなってしまったり、網に穴を開けられてしまったり、漁獲対象種が傷つけられてしまったりとデメリットの方が大きいです。そのため、かつては沖で網から出して逃がしたり、死亡していた個体は海上にそのまま戻したりしていました。しかし混獲自体は定置網の性質上仕方のないことであり、この実態を明らかにすることで、よりよい保護活動に繋げることができます。現在では、調査に協力してくださる漁師さんが増え、ウミガメを船に乗せて漁港まで持ってきて頂けるようになりました。

このようにウミガメが得やすい環境であることや、漁師の方々が協力してくださるおかげで室戸でのウミガメ調査が成り立っています。

標識放流の成果として、室戸で 2023 年 5 月に放流した個体が宮崎県のお倉ヶ浜で同年 6 月に産卵していたことがわかりました。また、2021 年 4 月に放流した個体が 2023 年 6 月に鹿児島県の屋久島で産卵していたり、2019 年に和歌山県のみなべ町で産卵した個体が 2021 年 4 月に室戸で混獲され、2023 年 6 月に再びみなべで産卵していることなどが確認できています。また日本国内に限らず、2009 年にメキシコで放流されたアカウミガメが 2018 年 6 月に室戸で混獲され、野生個体の太平洋横断が確認できたのは世界で 2 例目となりました。さらに、中国でのウミガメ密漁船に室戸で放流した個体も含まれていることが分かりました。

この原稿を執筆している本日もアカウミガメが 2 頭混獲され、インコネルを装着し放流しました。先日は、混獲されたアカウミガメにインコネルだけでなく甲羅に GPS 装置も取り付けて放流を行い、現在進行形で動向を探っています。

これまでの 5000 頭の調査には歴代のスタッフたちの努力があります。私達もその意志を引き継いで今後も調査を続け、ウミガメの生態解明に繋げられればと思います。



GPS を装着したウミガメの放流

# 第34回日本ウミガメ会議 名古屋港大会のご案内

事務局 松宮 賢佑

今年で 34 回目を迎える日本ウミガメ会議は、12 月 8 日から 10 日までの3日間、愛知県名古屋市にある名古屋港水族館で開催されます。

日本ウミガメ会議は、毎年ウミガメに縁のある土地で開催していますが、今大会がなぜ水族館での開催なのか疑問に思われた方もいるかもしれません。前号で館長の栗田様にもご紹介いただきましたが、名古屋港水族館は 1992 年の開館当初からウミガメ類の飼育繁殖に取り組まれ、室内でのアカウミガメ、アオウミガメ、タイマイの繁殖に成功していらっしゃいます。また、水族館生まれのアカウミガメにアルゴス送信機を装着し、回遊経路を調べる取り組みも行ってこられました。長年に渡り飼育ウミガメの研究を続けてこられた名古屋港水族館で、今年は皆様とウミガメについて語り合いたいと思った次第です。今大会は飼育ウミガメにもスポットを当て、日本各地にある水族館がウミガメの調査や研究、保護といった活動にどのように関わっているのか、謎多きウミガメの生態解明にどのように取り組まれてきたのかを知る大会になればと考えています。

本会議を含めプログラムはすべて水族館の中で開催します。参加者受付は水族館内に設置しますので、日本ウミガメ会議に参加の皆様は各々で入館チケットを購入してから参加受付をする流れとなります。受付後は名札をお渡しますので、会期中の3日間はご自身の名札が入館チケットとなります。初日はチケットを購入し、館内を見学しながら日本ウミガメ会議の受付にお越しください。また、会場が名古屋市内ですので、これまでに比べると都市部での開催となります。たくさんのお申し込みが予想されますので、参加をご検討の方は早めのお申し込みをお願い致します。申し込み開始日は決定次第、当会のホームページとウミガメ速報、SNS でお知らせいたします。



12 月の名古屋港大会に向けて、事務局も準備を進めております。参加予定の皆様もどうぞお楽しみにお待ちください。

# 痕跡調査のお話

黒島研究所 中西 悠

今年もウミガメの産卵シーズンがやってきました。当研究所でも島の西部にある西浜（にしこはま・いりんぱま）で産卵調査を行っています。ウミガメの産卵調査といえば、夜に張り込んで母ガメを待つというようなイメージが強いかと思うのですが、黒島は年間30～40回程の産卵しかなく、毎晩カメが上陸するわけではありません。また、研究所の職員は2～3人ですので、毎晩浜にいるとお昼の施設開館ができなくなってしまいます。そこで全国の浜でもよく行われている、上陸の痕跡調査がメインの調査となっています。

この痕跡調査は、文字通りウミガメが産卵にきた跡を見て卵を産んでいるか調べるものなのですが、慣れてくると産んだ跡を見ればどの種類のウミガメがどのあたりに産んだのか、あるいは産まずに帰ったのかが大体わかります。探偵のような調査ですね。特に黒島はアカウミガメ・アオウミガメ・タイマイと日本で産卵するウミガメ3種ともが産卵に来るので見分ける力が必須です。

アカウミガメ（図1）・タイマイ（図2）は比較的体重が軽いのでクロールをするように歩くのに対し、アオウミガメ（図3）は重い体を動かすために両手を同時に使ってバタフライのように歩きます。アカウミガメとタイマイの違いは産む場所です。アカウミガメは浜の真ん中で産むのに対し、タイマイは草の生えているところの中まで進んでいて産みます。



図1. アカウミガメの足跡。  
交互に跡が付きます。



図2. タイマイの足跡。アカウミガメに似ていますが  
草の生えている場所まで延びています。



図 3. アオウミガメの足跡

このように毎年浜を歩き調査をしていると、ウミガメだけでなく他の跡にも詳しくなってくるわけで…（全国のスーパーマリントラーにはかないませんが）、砂浜の上にいろいろなドラマを見ることができます。少しその他の足跡を紹介したいと思います。

まず、黒島をはじめ沖縄の砂浜でよく見られる足跡がオカヤドカリの足跡（図 4）です。殻を引きずった跡が真ん中にできるので、子ガメの足跡と間違えられことがあります。子ガメだと大勢でまとめて海に向かうので、よく見れば違いがわかります（図 5）。次に多いのがスナガニの仲間の足跡です（図 6）。砂浜で見つかる小さな穴はほとんど彼らの巣です。そして蛇が這った跡です（図 7）。沖縄本島北部ならカメの卵を食べに、アカマタという蛇が出てくることがあります、黒島だととても珍しいです。思わず写真を撮ってしまうほどです。

人の跡も面白いです。西浜にはあまり観光客が来ないので、もし跡が残っていたら、歩いたり走ったり犬と散歩をしたり、寝ころんだり砂遊びをしたり…だいたい何をしていたか見当がつきります。

浜歩きは歩く地域によっても違いがあって面白いです。石垣島・西表島ではカメの卵をイノシシが食べた跡が見つかったりもしますし、牛の足跡があったりもします。

足跡はその生き物がいなくても楽しめるものです。皆さんもぜひ浜歩きの際は痕跡を探してみてください。



図4. オカヤドカリの足跡



図5. 子ガメの足跡



図6. スナガニの足跡。

上を鳥が歩いていますが種類はわかりません。



図7. 蛇の跡

## インターン実習を終えて

神戸動植物環境専門学校 奥田 希心

私は将来動物にかかる仕事をしたいと強い希望を持って、動物の専門学校に入学したものの、明確に目指したいものがなく、毎日同じことを繰り返す学生生活を送っていました。そんな中、2022年に学校の先生から和歌山県みなべ町でウミガメの産卵調査のインターン実習があるとの案内を受け、気付いたら「私も、やりたいです！」と手を挙げてい受けました。そこから学生生活にウミガメが入ってきました。希望した理由としては、「野生の動物の姿」が好きで、どんな動物でも危機に晒されているのであれば、少しでも力になりたいと思ったからです。



「ウミガメの産卵・野生動物」という本能的に惹かれる言葉に飛びつき、2週間のインターン実習に参加しました。このみなべでの2週間は長いようで短く、私は当時1年生でしたが、2年生の先輩がない時には、一時的に調査のリーダーをさせていただきました。

初めてウミガメの産卵を見た時には「野生に生きる動物」を目の当たりにしたこと、生命が受け継がれていくということを実感し、とても感動しました。しかし、本物の野生動物に圧倒されてしまい、練習ではできていたはずの計測ができませんでした。悔しい思いをしたこと勉強を重ね、ウミガメについてもっと知りたいと思うようになりました。この思いは1年経った現在でも鮮明に覚えています。

和歌山県での出来事もあり、その年の第33回ウミガメ会議・やんばる大会の開催を聞いた時には迷わず参加すると決めました。記録係として走り回っていた3日間でしたが、印象に残っていることは、何十年と毎日欠かさず浜で痕跡調査をしている方がいらっしゃるということでした。その方の写真を撮らせていただいた際に、その方自身からウミガメに対する温かい思いが溢れ出ていることに気が付きました。この時、写真撮影は動物を撮るために始めた私の趣味でしたが、このように動物のために何十年と活動されている方のことを私が撮った写真で広めていきたいと強く思いました。そのためには、私自身ももっと動物と関わり、今までとは違う角度で世界を見ること、視野を広げることが必要だと思いました。

ウミガメが学生生活に入ってきたことによって、沢山成長できたと感じています。今年の夏、昨年に引き続きウミガメ協議会事務局のインターンをしました。実習では、ウミガメを学ぶ市民講座の講師のお手伝いもさせてもらいました。実際に人前に出て、過去に撮影した写真とともに言葉で発信する経験をさせてもらいました。このようなことから、興味本位で始めた「写真」を撮ることに意味を持たせることができました。これからは「誰かの心に響く写真を撮ること」でウミガメはもちろん、他の野生動物の保全にも貢献していきたいと思っています。



レクチャーって難しい！と実感中の奥田

## 事務局より



### ご寄付をいただいた方々

シャディ(株)、吉崎和美、橋爪優美子、コカコーラボトリング（道の駅日和佐かめのろう）、ヤフービジネスサービス、永田康剛、小林雅子、串本海中公園、片山弘子、公益財団法人パブリックリソースセンター、玉岡昇治、藪幸子、三方泰子、吉田一也、長谷川久美子、池村茂、岡田一郎、森川憲勝、阿部寧、小林雅広、太田英利、細野広美、からたち、近海郵船(株)、大内裕貴・喜来、林原和子、太平電気(株)（エコひいきプロジェクト）、ニチレイマグネット(株)、(株)ギフトパッド、タケシタトオル、清水すみゑ、亀田剛、平尾美幸、南知多ビーチランド、事務局・黒島研究所・みなべ基地・むろと廃校水族館に募金&差し入れをくださった皆さま（ご寄付をいただいた順、敬称略）



### お知らせ

次号のマリンタートラーは3月の発行を予定しています。



## STSmembers募集中！

STS(Sea Turtle Support) membersは、ウミガメと共に生きていける自然、環境について考え、その研究・保護活動に協力する人々の集まりです。日本ウミガメ協議会では、当会をサポートしてくださるSTSmembersを随時募集しています。

皆様のお知り合いで自然が好きな方、海が大好きな方、ウミガメに興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非入会をお誘い下さい。

入会金 なし

年会費 個人会員 3,000円

団体会員 10,000円

特別会員 100,000円

会員特典 オリジナル会員証&グッズのお届け

ウミガメ速報の配信

機関誌(マリンタートラー)のお届け



## 編集後記

毎日毎日暑いですね。こう暑いと海へ入りたくなります。私ごとですが、3年前から海女を始めました。狙いはトコブシ(小型のアワビの仲間)です。じっくり弱火で甘辛く煮付けると、柔らかくて絶品な貝です。ある日泳いでいると、近所の70代ぐらいのおばあちゃんが白い海女の衣装を着て颯爽と現れ、「ちょっとだけ獲ってくるわー!」と海へ向かいました。格好いい。ちょっとだけと言いつつ、2時間経っても戻ってこないので心配しましたが、その後無事を確認しました。私も将来こうなりたいと思うおばあちゃんに出会えた夏の日でした。

(事務局 平井紗綾)



マリンタートラー(日本ウミガメ協議会機関誌)

発行日 2023年 9月 1日

発 行 日本ウミガメ協議会

〒573-0163 大阪府枚方市長尾元町5-17-18-302

電話 072-864-0335 Fax 072-864-0535

URL <http://www.umigame.org>

E-mail [info@umigame.org](mailto:info@umigame.org)